慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	市古貞次氏蔵奈良絵本「おちくほ」翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1986
Jtitle	三田國文 No.5 (1986. 6) ,p.16- 32
JaLC DOI	10.14991/002.19860600-0016
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19860600-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

市古貞次氏蔵 奈良絵本〔おちくほ〕翻刻

石川 透

例言

一、本翻刻は、市古貞次氏蔵奈良絵本〔おちくほ〕（秋之上・中・下）である。本書は、従来、〔佚名物語〕（三冊）として知られていたが、外題を『おちくほ』（秋之上・中・下）と推定した。

一、本書は、実践女子大学図書館常磐松文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（春之上・中・下）、同文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（秋上）、チェスター・ビーティ図書館蔵『四季さうし』（夏之上・中）とともに、別本『落窪の草子』（仮称）の一部を構成するものと考えられる。尚、以上四本を含めた、別本『落窪の草子』についての考察は、拙稿「別本『落窪の草子』の存在」（『中世文学』第三十一号）に譲りたい。

一、本書の書誌は以下の通り。

奈良絵本。袋綴、三冊。竪二九・八糎、横二二・四糎。料紙、鳥の子紙。紺地金泥草木模様表紙。表紙左上に題簽があるが、題名は削り取られている。内題なし。墨付、上・二三丁、中・二〇丁、下・二四丁。毎半葉一〇行。字面の高さ二三・五糎。挿絵、上・中・下ともに七頁、ただし、挿絵はすべて抜き取られている。

一、翻刻に際して、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、読点を多く施した他、（ ）をもって丁数やママを示した。

一、最後に、翻刻を御許諾くだされた市古貞次先生に、厚く御礼を申し上げたい。

〔おちくほ　秋之上〕

さなきたに、秋の夕部は物かなしく、西ふく風も身にしみて、まくらの下のきり〳〵す、こゑもやう〳〵かれ〳〵に、あはれをそふるおりなれは、なつさふ人の御ことを、よすからおほしつゝけて、ふるきまくらのしたはしさ、くらふに物はなかりけり

ちうしやうも、この人に、その心さし、おいらかなれは、あさからぬちきりにて、いかてか、うちやり給ふへき、あまり、こゝちむつかしとて、里の御しよへおり給ひて、ふるき物かたり（1オ）なと

を、とり出させ給ひて、詩をすんし、歌をよみ、あはれ、はかなき世の中にと、かきたる、ふるきこと葉を、ひとりこちて、ひちつえつかせ給ひて、おはしけるところに

いとしのひやかに、あんないをそ、こふたり、わらは出て、たそと、いへは、此文、ちうしやうとのへ、まいらせ給へと、いふほとに、いつちよりそと、いへとも、さきをいらへす、たゝ、参らせよと、申けるほとに、とりて、ちうしやうに、たてまつりけれは、玉水よりの御せうそこ也（1ウ）

うちよろこひたまひて、ひらきて　御らんすれは、秋の山より、このみをまうけさせまひて、めつらかに、かしつかせ給ふよしを、ことのたよりに、ほのきゝ侍ることの、うらやましさよ、是につけても、我身は、いつの日の、いかなるときにか、うまれいてゝ、すみし都を、あくかれいてゝ、かゝるてんとの、いふせき、しつかかや屋にて、苔のとほそにとちられ、ともなふ人もあらはこそ、軒にはふなる葛の葉の、うらなく物をおもふ身を、なとはかなしと（2オ）、とひ給はて、うちやり給ふことの、うらめしさよなと、かゝせ給ひて

かはかりに、はかなき身をは、世の中に、おきてわひしき、露ときえはや

たゝならぬうき身をなと、おほしやらぬ事こそ、ほいにおもひ侍らねなと、いとねたましけに、かゝせ給ふも、あはれなり

中将は、つく〳〵と御らんして、かくこそはあるへけれと、おほして、ちうしやうは、此人と、心くらへをせんに、いつれか、おもひのおとり侍らむとよ（2ウ）、とかく、かきて、つくすへき事にあらすとて、御つかひを、ひそやかに、おはしまのもとへ、よはせ給ひて、かへしは、わさとなきそや、ちかきほとに、忍ひて、わたりなんと、よく〳〵申せと、のたまひて、かへし給ふ

そのゝち（3オ）

〔挿絵・第一図〕（3ウ）

ちうしやうは、六位をめして、我は、かの玉水へ、うちこえんと、おもふなり、父大臣との、御ようの御事あらは、心さしありて、住よしへまうてけるよしを、よく〳〵申せと、の給へは

六位は、うけ給はりて、ちかきほとに、御節会のおはしますに、御やくをかゝせ給ふな、いそき〳〵かへらせ給へとそ、申ける

ちうしやうは、わらは、たゝひとり、つれさせたまひて、あさまたきに、出給はんと、し給ひけるか

おりふし、主殿のつほねは、きたりて、いかにや、此ほとは（4オ）、うへの御こととのみしけくて、心ならす、まいり侍ることもさふらはす、まんところのおほせには、中将殿、なにとありけるやらん、御心むつましけに、あけくれみえ給ふこそ、いと心もとなけれ、いかなることをかやみぬるそや、よく〳〵たつねてこよと、のたまひしなり、何と、おほしめしけるそや、かの君の御こととにのみ、御心うつさせ給へは、よろつにうとくこそ、おはすらめと、おもひ侍るそやと、聞えけれは

ちうしやう、きこしめして、されはこそ、いま（4ウ）むかへる人を、心におもひそめねは、よろつにつけて、物のけちめ、みえ侍るそや、かね〳〵、御身か、しれることく、むかへぬるとも、いかてか、ことのすなほなるへき、いみしき事は、出こすして、おかしきことのみ、いやまさりなむと、おもひしに、たかはさるそや、たゝ、わかねかひは、日ころ、むつひし人を、むかへて、めやすく、

かしつかはやとのみ、思へは、よろつにうとくなりて、人にも、にくさけに、思はるゝそやと、のたまへは
とのも、うちきゝて、うへ（5オ）うへの御はからひの、姫君を、いくほともあらす、みすて給ひなは、いかて、御ためよかるへき、こゝろなかく、物し給ひて、よき時せつをとりて、いかやうにもしたまへと、申けれは
中将、きゝたまひて、是見よ、ふみこしさふらふか、みるよりあはれにおもひて、こらへつへうもなけれは、けふは、忍ひてこさはやと、もよほせし侍るそやとて、御ふみとり出て、とのもにみせ給へは
とのも、つく〳〵とみたてまつりて、あはれにそ聞にける（5ウ）、けにも、御ことはりにこそ、かく、おほしつゝくるもいたはしく、とかく、御身の、心地、むすほほれたまふも、御ことはりそやとて、なみたをともにそ、なかしにける
ちうしやう、けふは、かの人へ、こしたて侍るへし、やかて、かへりこんと、のたまへは、とのも、むかへさせ給ふ
ひめ君も、なにとやらん、御こゝちあしとて、丁のうちにのみ、うちこもりおはしまして、なかめかちにおはしけるよし、まん所のおほせにてさふらふそや、とき〳〵は、おはし（6オ）まして、うちかたらひて、したしみたまへ、たかきもひくきも、女は、ひとつ心にて、おつとの、もたする心にて侍るそやと、うちあてゝ、聞えけるもかしこし
中将、うなつき給ひてけれは、とのもは、とくして、かへりにける（6ウ）
〔挿絵・第二図〕（7オ）
そのゝち、中将殿は、わらはひとり、御ともにて、しのひやかに、くたり給ひけるか、程なく、おはしつきて、いつちにてかあるらんと、とのもかのもに、たつね給ふか、沢辺に、あやしけなる、女のわらは二三人、草の葉をつみおりけるに、かう〳〵ある人やあるらん、おしへよと、の給ひけれは、かしこまり候とて、ちうしやうとのゝ、さきにたちて、あゆみけるか、ほとなく、これに候とて、かへりぬ
中将、つく〳〵と見給ふに、まことに、あやしきかやは（7ウ）らのおくに、いさゝかしつらひたるか、軒は、つたかつらの、朽葉なるか、はいまとはりて、いと物あはれなるに、小柴垣のあみ戸をおしあけて、たれかあるよと、申させ給へは
めのと、ちうしやうとのゝ御こゑときくより、つゐたちて、あら、めつらしの御入やとて、ひめきみに、かくと、申けれは
ひめ君は、さしいて給ひて、中将殿と、見給ひしより、まつ、はら〳〵とそ、なかせ給ふ
ちうしやうも、ひめきみの御すかたを、御らんして、御なみた（8オ）くみ給ふ、めのとは、御手水をとりて、御あしをすまして、そのゝち、座につかせ給ひて
いかにや〳〵、御身のことのみ、かた心におもひこちて、夢にもうつゝにも、わするゝことはなきそとよ、女御、父大臣とのゝ、御はからひにて、人をむかへて侍れとも、さらに、こゝろもうちとけす、うちかたらふ事もなけれは、此人も、いさめるこゝちもおはせす、たゝ、つれ〳〵にて、心地もにこりて見え侍るそや、なかき夜のめさむるおり〳〵は、有しむかし（8ウ）のむつことを、おもひいてゝ、ひとり、なみたにうちむせふありさまは、まくらより外、

知人もなきそやと、さめ〳〵となき給へは
姫君は、日ころのちきりにたかひて、おり〳〵のふみたに、給はらぬ事の、うらめしさよ、あたらしき人を、うちかたらひたまへは、うつれはかはる、うき身のならひなれは、なけくへきにしもあらねとも、ひとりおはするおやを、ふりすてゝ、かやうに、いふせきすまゐをなせしも、たれゆへそや、ひとへに、御身と（9オ）ちきりしゆへに、かくなりゆくと、おもへは、うらみは、ことさらのこるそや
たゝならぬ身にしあれは、一かたならぬおもひにて、とにもかくにも、みやこのことのみ、おもひいたさぬおりもなく、なみたのたねのみ、つくせるを、おほしやらぬもうらめしやと、かきくとき給ふも、ことはりなり
扨は、ちうしやうも、我かたさまにて、おもひくらせるも、いかてか、御身におとり侍らん、御こゝろやすく思ひ給へ、とく〳〵、此人をおくりまいらせて、わか（9ウ）御所へむかへて、めやすくあらせたてまつるへきそや、さんは、いつなるらん、うしろめたくこそおもひ侍れと、のたまへは
くる月ころと、おほえはんへると、のたまへは
さもあるならは、めのとよ、はやく、我かたへ人をこし候へと、いとわりなくそ申させたまふ
かくて、こゝにおはして、たかひに、あたくらへまし〳〵て、山里の、いとあはれなる事からを、なかめくらし給ひけるに、しつかしわさの、あさ夕に、やすらかなることも（10オ）なく、わひしけなるふせいを、見給ふにつけても、うき世のありさま、はかなく、あはれにそおほしける
中将殿は、日ころ、おほしめしあかぬ御中なれは、一日二日と、くらし給ふか、あかすかなしくおほして、はなれもやらせ給はす、しはし、こゝにそおはしける（10ウ）

〔挿絵・第三図〕（11オ）

さるほとに、みやこには、大臣の御節会おはしけるにつゐて、このちうしやうとの、内弁のやくに宣下せられけるに、おはせさりけれは、大臣との、すみよしまうてと、ききしか、いつちへかゆきつらんと、六位をめして、御たつねありけれは、我らも、さやうにうけ給はり侍ると、申
大臣殿、こよひの内弁、つとめはつれ候はゝ、みやこのうちには、かなふましきにてあるそと、いからせたまふ
されは、くきやう、てんしやう人、かんたちめに（11ウ）いたるまて、をの〳〵、陣の座へうつらせ給ふか、ちうしやう、おはしまさねは、ちからなく、新三位のちうしやう、このやくをそつとめ給へりける
かゝるほとに、六位は、ふみかきて、玉水へ、いそき〳〵わたらせたまへと、かきけれとも、とみにも出やり給はて、あくる日のくれかたに、京へおはしけるほとに
ちゝ大臣との、大にいからせ給ひて、教良のはんくわんを、御つかひにて、中将、わか猶子として、その祖をまほりて、朝につかへたて（12オ）まつるへき身の、よをないかしろにおもひて、みつからか心に、よろつまかせ侍る事の、つみ、いくはくそや、君より、中納言のせんし下さるれは、いなみたてまつる、春宮女御より、我子とうまるゝによりて、ふさいをはからひ給ふに、かたしけなしとは思ひ侍らて、かたはらにうちやりて、ゆくゑもしらす、こゝかしこ

さまよふ事、節会の御やくを、かねてきゝなから、いつちへゆくやらむ、あとけちて、つとめさる事、われ、かゝる（12ウ）まつりことを、うけ給はる身の、かはかりにけなきものを、都にをきては、そのまつりこと、きよからす

君も、臣も、日ころのきりやうにちかひて、うときものと成たるは、ひとへに、大臣かしわさなりと、申させたまふは、ことはりそや、さかなくも、うしろゆひをさゝるる事こそ、きつくわいなれ、すくに、るさいにさすへしと、いらなくおほせ付らるれは

ちからなく、中将殿にまいりて、このよしを、くはしく聞えけれはちうしやう、いさゝかも（13オ）おとろき給はす、もとより、かくあるへしと、おもひまうけしみちなれは、おとろく事はなきそかし、配所はいつちなるらんと、とはせ給へは

はりまのくに、竹の岡とかや申所へ、うつしたてまつれとの、御沙汰にて侍ると、申せは

今一たひ、母まんところへまいりて、御めにかゝりたくおもへとも、かゝる身となれは、それもちからなしとて、一間所にいらせ給ひて、玉水の御かたへ、ふみ、こま〳〵とあそはして、六位に、これをたしかにとゝけよと、涙なから（13ウ）にわたし給へり、御母まんところへも、今また、かたらひたまへる、ひめきみへも、御文、まいらせ給ふ

すてに、はんくわんらは、馬にて、けいこつかまつるへしとて、もよほしけれは

中しやうとの、六ゐをめして、おほせけるは、我、かく、るにんとなりゆくことも、ひとへに、この女はうゆへなれは、ひたすらに、御へんをたのみ侍るそや、くる月ころには、さんをとくへし、なんしならは、なんち、心をそへて、我かたみとおもひてそたてゝ、なき身とならは（14オ）、ほうしにもなして、跡とはせよ、ふみにも、くはしくかきたるなと、こま〳〵聞えさせ給ふも、あはれなり（14ウ）

〔挿絵・第四図〕（15オ）

御母まんところは、ひとへに、夢のこゝちし給ひて、まことに、人にすくれて、いみしきちうしやうとて、うらやまれしものゝ、いかなるてんまのしやうけにてや、かゝるうき身とはなりゆくらん、たゝひとりある中しやうを、かく、左遷のたひにまとはして、老の身の、あとにのこりて、はかなく、物をおもはなん事の、かなしさよとて、こゑもおします、なけかせ給ふも、あはれなり

さるほとに、ちうしやうとの、けいこのふしとも（15ウ）に、かこまれて、さすらへのたひに、おもむき給ふそ、あはれなる、すみなれ給ひし都を、出給ふとて、かくそよみ給ひける

けふまても、たひちにまとふ、我なれは、たひ立とても、おなしたひかは

かやうに、すさみ給ひ、出給ふほとに、六位も、ひやうこのうらまて、おくり奉りける（16オ）

〔挿絵・第五図〕（16ウ）

それより、御ふねにめされて、いそきたまふほとに、ほとなく、播磨とかやにも、つかせたまふ、竹のおかのしゆこ人にあつけて、人々は、みやこにかへりける

しゆこ人は、あたらしく家をつくりて、ちうしやうとのを、いれたてまつり、あさゆふにまいりて、かしつき奉るを、見給へは、にくさけなるおのこの、ひなひたるか、たみたるこゑにて、物きこゆる

も、あひなきやうにはあめれと、又けうありて見えわたりける、ともなひ給ふ人もあら（17オ）はこそ、いつしかの御あそひには、みやこよりもたせ給ふ、御琴をとりいてゝ、ひきならしあそひ給ふに、まことに、ひなのことなれは、是をしる人もあらはこそ、たゝ、めつらかに、おもしろき事そとて、あやしのしつにいたるまて、みゝをそはたてゝそ、聞にける

こゝに、顕密の二法を修しける、僧のありけるか、これをきゝて、此所のしゆこ人、有治の別所といへる人と、うちつれて、ちうしやうへまいり、さこそゆゝしきみやこの、くうてん（17ウ）らうかくのうちに、おはしまして、かゝる、草ふかき西海のはてに、御いりさふらひて、さこそ物うくおほしめしさふらはん、御心のうちこそ、あはれとはおもひたてまつれとて、あさなゆふなにまいりて、御つれ〳〵をそ、なくさめたてまつりける

ちうしやう殿は、うらはまのありさまを見はやと、おほしめして、この人〻に申させ給へは、うけ給はりて、御ふねをしつらひて、うちのせたてまつり、あみをおろさせ、あまにかつきさせなとして（18オ）、ひめもす、あかしくらさせ給ふ

ひるつかたは、かゝるあそひにて、うちまきらはし給ふか、日もくれかたよりは、都の御かた、こひしくおほしめし、人しれぬ御なみたのみ、なかし給へり、中にも、玉水の御かた、いかゝし給ひつらんと、おほしめして、夢に成とも、此人に、今一たひあはまほしそ、おほしける（18ウ）

〔挿絵・第六図〕（19オ）

さるほとに、六位は、玉水へまいりて、ひめ君に、御文たてまつりけれは、ひらきて、見給ふに

もとより、あふはわかれのはしめにし侍れは、なけくへきにはあらねとも、おもひの外なる御かんきをうけて、さいかいのはてに、流人となりゆく身なるそや、すてに、都を出しとき、今一たひあはてと、いかはかりおもひしかとも、警固のものゝふともに、かこまれぬれは、ちからなく、六位によく〳〵聞えけるそや、さんをとけさせ給ひて、なんし（19ウ）ならは、我いはんやうにし給ふへし

かねておもひつゝけしは、御身をみやこへうつして、こゝろやすくあらせはやと、おもひしことも、いたつらに成ぬる事の、くちおしさよ、かゝるうき身となりぬることも、よく〳〵おもへは、御身をふかくおもひしゆへに、よろつかきくれて、心地まとひ、よのわさもつとめ侍らて、かくうきをなかし侍るそや、御身も、わかうへわすれ給はすは、しゝたりときゝ給ひなは、後の世をたのみはんへ（20オ）るそやなと、かゝせ給ひて、おくに

玉の緒の、たえすもあらは、うき世にて、いま一たひを、ちきることの葉

と、あるを見給ひて、御かほにおしあてゝ、ひきかつきふし給ふ

六位は、めのとに聞ゆるやうは、御身も、たゝならすわたらせ給へは、いたくなけかせ給ひては、さはりとも成給ふへし、これは、ひとへに、ちうしやうとの、あまりにひめ君をおほしけるによりて、御心をすくよかになをし給はんとの、御い（20ウ）ましめと、聞えさふらへは、ほとなく、かへり給ふへし、そのおりふしに、わか君、おとなしやかに、よういくおはして、みせさせたまはゝ、うきを引かへて、ことたつことの有へきそや、よく〳〵、姫君をかしつき給へと、申けれは

めのと、申けるは、今は、ほとはるかにおはしませは、いかにおほ

しめすとも、中将とのゝ御たよりは、かたかるへし、けふよりは、御身を、ちうしやうとのとたのみ給はては、いかてか事のよすかあらんと、い（21オ）とあはれに聞えけれは（21ウ）

〔挿絵・第七図〕（22オ）

六位は、これをきゝて、いまめかしき事をきく物かな、なにはにつけて、それかし、あるうへは、心やすくおもひ給へ、中将殿につかうるも、ひめ君につかうまつるも、おなしみちにて侍るそや、中将、かやうになり給ふことのかなしさは、ひめきみよりも、まさりて、心かなしく侍れとも、今さらせんかたなきそかし、あはれ、わかおもひには、ちうしやうとのと御ともして、いつしか、つかへはんへりなは、かはかり、物はおもふましと（22ウ）、これのみ、あさ夕おもふそやと、袖をかほにをしあてゝ、さめ〳〵とそなきにける、やゝありて、ひめ君は、とにもかくにも、六位をちからにおもふそや、あひかまへて、うき世にすさめられしものなるとて、見はなち給ふなと、の給ふも、あはれにはかなくそおもひける、さてしも、あるへきみちならねは、やかて、まいりさふらはん、いかに、めのと、よく〳〵いたはり給へとて、なく〳〵京へそかへりける（23オ）

〔おちくほ　秋之中〕

さるほとに、御母まんところは、ちうしやうとの、かやうに、左遷のたひにおもむかせ給へは、ふかくかなしみ給ひて、あけくれ、うちふしなけかせ給ふも、あはれなり

されは、むかへ給ひしひめきみも、今はたれをかたよりにおはすへき、えにしうすき、ちうしやうとのにまみえ給ひて、よしなきうき身と成ぬるこそ、ほいなけれとて、御さとさしてかへり給ふそあはれなる

おはせしおりからのふせい、御くるまいみしく（1オ）、御ともの女はう、みこしなかへにて、御ともの人々も、なまめかしく、きよらかに出たち、かなたこなたとほのめきしに、いたはしくも、ひめ君、あやしけなる御こしに、やつれさせ給ひて、たそかれときに、忍ひて、御里へかへらせ給ふそ、あはれには見えにける、まことに、きのふの栄けふにのこらすと、いへるも、いまおもひあたり給へりける

まんところは、あるとき、主殿をめして、仰けるは、いかにや、とのも、ちうしやうは、なにとしてか（1ウ）、いつそのころより、かくうとくは成ぬる事そや、御身はしらさるにやと、たつね給へは主殿、申けるは、しか〳〵の事は、つまひらかにはさふらはす候か、いつのほとよりか、やんことなき人のむすめを見給ふよしを、ほのきゝてさふらふか、もし、かゝる人をわりなくおほしめして、とやかくやと、御こゝろまとひ給ふにやと、申けれは

まんところ、きこしめして、かゝる事におもひわひて、よろつにかきみたれなは、なとか、いかさま（2オ）にも、そのかけのなからん、たれありて、我にしらするものもなく、かく、えんたうへ、左遷の身とはなしぬるそや、かはかりになりては、今さらくやみても、かひなき事のかなしさよとそ、なけき給ふ（2ウ）

〔挿絵・第一図〕（3オ）

さるほとに、ひめ君の御父、ちうなこん殿の北のかたは、あるとき、うちむかひてきこゆるやうは

関白殿の御ちやくし、下久保のちうしやうとのは、さいこくのはてへ、なかされ給ふことのふしきさよ、ゆへをきゝ侍へるに、ちかきころ、止事なき人のむすめをよはひて、こゝかしこにとりかくして、なつさふほとに、子たち、あまた出きさせ給ひて、いよ〳〵このものにのみ、色ふかくおもひつき給ふを、かそいろの人々は、露ほともしろし（3ウ）めさす、あき山とのゝひめきみを、むかへさせ給ひしに、これには、露のまもかたらひ給はて、うちやり給ひて、たゝこのよしなき女はうにのみ、うちこもりおはしけるほとに、まつりこともひかめにし給ひ、よろつかきくれさせ給ふにより、かく左遷し給ふときく

世には、いたつらにうき世をたつるものこそおほけれ、御身のひめきみも、かゝるやうにやあらん、よしなきものとかたらひて、いかなる所にか、あさましきありさま（4オ）にてあるらんと、かたり給へは

中納言との、きこしめし、たかきもいやしきも、かやうのみちは、えらはすあるならひにて侍るそや、いつくのくに、いかなる所にありぬとも、ゆくゑたにきくならは、いかてか、とはてあるへきそや、わかきときは、たれとても、かやうの事は、なんによにかきらす、あるならひそかしなと、の給ひにける

まゝ母、きゝたまひて、かゝるいたつらなるむすめを、もたせ給ひても、我子とおもへは、いとをしきそや（4ウ）、大臣とのは、摂政の御身にても、たゝひとりの御子を、あしくうき世をこちたせ給へは、なかさせ給ふそや、いはんや、御身のむすめの心として、おとこをかたらひ、くるひまとへるものを、こひしたひ給へる事の、おこかましさよとそ、のゝしり給ふ（5オ）

〔挿絵・第二図〕（5ウ）

さるほとに、玉水のひめきみは、なけきなからも、月たちて、あたる月には、御さん、たいらかにとけさせ給ふ、御子とりあけて御らんすれは、玉をみかけることくなる、わか君にてそおはしける

姫君は、御らんして、あらはかなのわかやな、いつしか、みやこに有ならは、一もんの人々あつまりて、ことたつことのしけからんに、くはほういみしきものかな、かゝる、てんとのはにふの小屋にて、むまるゝことのはかなさよと、くとき給ふも、あはれ（6オ）にそ聞えける

あたりのものともまいりて、とかくと、いたはりたてまつるほとに、きのふけふと、うちくれてけれは、ひめ君は、御ふみをかゝせたまひて、六位かもとへしらせよと、の給へは

めのと、うけ給はりて、やかて、人をこしらへて、みやこへそのほせはんへりける

つかひは、六位をたつねて、ふみをわたしけれは、蔵人はうちみて、ひそやかに、御返事をかきて、つかひはかへしけり

めのと、ひろけてみけれは、めてたき御ことのみ、是に（6ウ）すきはんへらす、とかくは、やかてまいりてと、かきにける

扨、六位は、女はうととのもに、ひそやかに、ふみをよみてきかせて、いかゝし侍らんと、いへは

人々、なみたおとして、ちうしやうとの、もろともにおはして、わかきみを御らんしなは、いかはかり、よろこひ給ふへきと、おもふやうにもなき事かな、とかく、六ゐは、くたり給ふへし、とのもかたより、わかきみの御うふきを、たてまつるへしとて、一かさねこしらへなと物して、も（7オ）たせて、六位はくたりける

ひめ君は、御らんして、世にうれしけにうちゑみて、仰せけるは、いかにや、わかゝ出きなは、はやくしらせよと、申させ給ふほとに、たよりもはか〳〵しくあらねは、人していひしに、よくもくたり給へるかなと、うちよろこはしくのたまへは

六位は、御さん、たいらかにおはしませは、なによりめてたく、おもひたてまつるそや、いてや、わか君、おかみたてまつらんとて、さしのひ、手をいたしけれは、めのと、わか君を（7ウ）いたきて、六位にみせけれは

蔵人はいたきて、あらうつくしのわか君かな、御そうかうは、いさゝかも、中将とのにたかはせたまはぬ事の、いみしさよ、いかに、父うへの見給はゝ、いかはかり、よろこはせ給ふへきに、くはほうすくなきわか君にて、おはします物かな

ちうしやうとの、みやこにおはして、ちうなこんとのより、むかへ給ふほとならは、おうち子は、くわんはくとの、あいやけは、中なこんとの、一家とうさいにみちさせ給ふ（8オ）、御よろこひの人々は、御やかたへ市をなし給ふへきに、はかなきはにふのこやにて、人しれす、たんしやうましますことの、つたなさよ

御うふきは、女御かうゐより、もちかさね給ふへきに、たゝ、めのとかふところに、おしこみはんへることを、めてたしと、おほしける事こそ、くちをしけれとて、ひろふたにのせ奉りて、御うふきぬ一かさね、とのもかもとより、まいらせ候とて、いたしけれは（8ウ）

〔挿絵・第三図〕（9オ）

ひめ君、さめ〳〵となかせ給ひて、たゝ世は、なに事もさかさまとなりぬることの、かなしさよ、主殿や蔵人か、子ともまうけたらんには、とらすへきものか、御身達に、かく、よろこはるゝことのふしきさよ、よく〳〵おもひよれる物かな、いみしくも、したゝめたりとて、わか君にきせまいらせて、六ゐにいたかせ給ひて、はやくせいしんして、六位にろくをひき給へとそ、申させたまふ

御さかつきをめくらし給ひて後、あるしの（9ウ）ふうふをめし給ふに、是は、六位かゆかりのものともなれは、おろそかにもおもひたてまつらす、よるひる、御前にてかしつき侍りけるか、御かはらけ給はりて、申けるは、ほとなく、わかきみ、御せいしんおはしまして、我〳〵にも、それかとおほせいたされて、そのとき、また、御さかつきを給はるへき、御やくそくにこそとて、三度いたゝきたてまつりける

されは、ひめ君は、いかにや、六ゐ、ちうしやうとのゝたよりといふ事は（10オ）、そのゝちよりはあらぬか、いかゝあるそと、申させたまへは

さん候、流にんのさほうにて、たやすく、たよりはなきものにて侍るそや、さりなから、ちかきほとに御さあるへきも、そんしまいらせさふらはす、わかしたしきものゝうちに、国々をめくる、しゆきやうしやのさふらふか、これにたよりて、ふみをまいらせ侍るか、さためて、此くれには、かへりきたり侍らんとこそ、おもひさふらへ、さもあらは、いかゝおはするありさまも、つゝまや（10ウ）かに聞え候はんと、申けれは

ひめ君、さもあらは、かならすしらさせ給へ、御とかめたにあらさらは、たとひ女の身なりとも、野のすゑ山のおくまても、たつねゆかんとおもへとも、おもふにかひなく、心のやみにかきくれて、むなしく月日をおくるそやとて、さめ〳〵とそなかせ給ふも、いたはし（ママ）し（11オ）

〔挿絵・第四図〕（11ウ）

かくて、その日も暮けれは、よもすから、都のうはさ、かたりあはせけるに、ひめきみの御父ちうなこんとのは、いかにおはするそやと、ゝはせ給へは

されはこそ、御ちゝうへは、過しころ、御節会のありしに、御やくに出させ給ふを、見たてまつりしか、いつとなく、御としもおいくれさせ給ひて、みえさせたまふ、まことに、いにしへは、御しやうそくめさせ給ひて、出させたまへは、あてやかに、らうたく、なまめかしき御すかたにて、おは（12オ）せしか、ひめきみをうしなはせ給ひしより、御なけきにひかれ給ひて、きら〳〵しき御よそほひも、こゝろのやみにかきくれ給ふことの、あはれにこそはさふらへと、聞えけれは

ひめきみ、きこしめし、あら、つみふかきみつからかうき身や、ひとりある父上に、かはかり、物を思はせたてまつりしことの、かなしさよ、此わかゝ、せめて、六七さいにもなるならは、是をちからとして、父うへにまいり侍るへきそやと、の給へは

六位、申けるは、それまても侍（12ウ）るまし、ほとなく、ちうしやうとの、御しやめむあるへきなれは、そのおりふしは、ことふきの御さしきへ、蔵人かすゝみ出て、御かはらけを給はらんとそ、申ける、夜もすから、御物かたりに、はや、鳥も鳴わたりけれは、御いとま申てのほりける（13オ）

〔挿絵・第五図〕（13ウ）

さるほとに、はりまの国に、いさゝかの事をろんして、国をあらそひ、ゆみやをとりて、みたれけるほとに、いちはやき世となれは、民のたまるへきかたもなくて、とうこくのたみは他こくへゆき、たこくへゆくかとみれは、また、このくにへいりこみけるほとに、しさいたうくなとも、うはひとられて、うれへにしつみ、なけく事かきりなし

されは、ちうしやう殿も、かなたこなたと、らう〳〵し給ひけるこそ、あはれはまさりてみえに（14オ）ける、竹のおかのしゆこしんも、うちもらされて、ゆきしらすなるもあり、また、他こくのゆかりをたつねて、おつるもあり、秋の木の葉の、あらしにみたるゝかことくに、成ゆきけれは

のこりゐる国人ともは、きやうへのほりて、殿下へまいり、このよしをなけきけれは、くわんはくとの、きこしめして、けんひいしらをつかはし給ひて、区徒をほろほして、民のうれへをやすめよと、おほせつけさせ給へは、をの〳〵うけ給はりて、くたりけるほとに（14ウ）、きんこくの侍ともをうちなひけて、けうとうをほろほして、世の中のさはきをそ、しつめ給ひける

かゝるほとに、大臣殿より、ちうしやうは、いかゝあるらん、いそき、しゆこして、のほりたてまつれと、おほせつけさせ給へは、うけ給はりて、かなたこなたと、御ゆくゑをたつね奉れとも、とふへき人さへ、あとけちてなかりけれは、せんかたそなき

こゝに、ひころまいりて、かしつき奉りける僧の、ひくわんの有けるか、出て申けるは、みたれの（15オ）おりふし、みな〳〵ちり〳〵に、いつちともなく、にけやり候ほとに、君にも、おちたまへとて、すゝめ奉り侍しか、にしをはるかにのひさせ給ひしよりのちは、しれる人もさふらはすとそ、申ける

けんひいしたちは、きゝ給ひて、扨、此君をあつかり侍りし人々は、いかにやと、申せは、おろかなる事をおほせ候物かな、その人

〻は、一はんにうちほろひ給ふと、申けり（15ウ）

〔挿絵・第六図〕（16オ）

ちからなくして、をの〳〵は、きやうへかへり、このよしを申けれは、摂政とのは、大におとろかせ給ひて、そのきならは、きんこくのものともを、こと〳〵くかり出て、たつねよ、いきたるか、しゝたるかを、しらはやとて、つかはしたまへは、かしこまりて、みな〳〵くたり給ひにける

御母まんところは、きこしめして、こは、なさけなきことかな、こんしやうのうちにて、今一たひあはてと、あけくれ、ねかひはんへりしに、ゆくゑも（16ウ）もなく成にしことの、はかなさよとて、うちこもりて、なけかせ給ふも、ことはりなり

さるほとに、中将殿は、みやこのかたへと、おほしめしけれとも、ものゝふとも、十方にむらかりて、おちゆく民をとらへて、衣類さいほうを、うはひはきとりけるほとに、このきみも、かなたこなたと、忍ひありかせ給ふに、あるものゝふともか、とりこめて、御いしやうを、こと〳〵くはきとり奉りけれは、やう〳〵、からきいのちをたすからせ給ひて、まとひ（17オ）ありかせ給ふか

たれをたよりに、おちこちのたつきも、しろしめされすして、すゝろにまとひゆき給ふか、いかなるさきの世のむくひにて、かはかり、からき世にくるしむことの、つたなさよと、うき身のほとをおもひやらせ給ひて、あしにまかせて、あゆみ給ふほとに、からうして、あかしのうらとかやいふところに、つき給ひぬ（17ウ）

〔挿絵・第七図〕（18オ）

こゝも、みたれにあひて、あとかたもなく、ちりまとひけれとも、このころ、世もおさまりぬとて、かへりきたりけるほとに、ところのものとも、すみしあとに、いさゝか、まやをつくりならへて、すみにける

ちうしやう殿は、このころは、山野にまよはせ給ふか、しよくしも、うちたえさせ給ふほとに、あゆみ給ふにも、あしにちからなく、竹のつえにすからせ給ひ、よろほひありき給ひしか、屠所の羊のあゆみは、我身におもひしられ、むしやう（18ウ）てんへんの愁喜は、手のうらをかへすよりも、はやく、うつりかはれる、うき世のありさまかな、きのふまては、きよくろうきんてんのゆかに、かしつかれ給ひし君の、けふ、かゝる有さまになり給ふへきとは、たれかしらん、浅ましき御ありさま、いはんかたそなき、ある木陰に、たちやすらはせ給ひて

情とは、世にあるときの、うへそかし、世におとろへは、とふ人もなし

かくして、そこをたち出させ給ひて、いそき（19オ）、人さとへと、たつねおはしけるほとに、あるひと、ちうしやうとのを見まいらせて、御身はいかなる人そ、いつちよりいてゝ、いつかたへかゆき給ふらんと、申せは

中将殿、きこしめして、我は、このころのくにのみたれに、所帯をらんほうせられて、からき命をいきて、かやうに、一日〳〵と、たとりまとひ候と、申させ給へは

あなあはれや、御身は、よしありけなる人そかし、たのみすむへきたよりも候はすは、いやしきわさをつとめ給ひても、世を過なん（19ウ）と、おほし候はゝ、身か所におはしませ、ふちせんとそ、申ける

中将、これこそしかるへき事なれ、あすはたとひいかやうにもなら

は成ぬし、けふのたゝすみをたのしまんと、思召て、うちつれていらせ給ふ

此家には、牛馬をあまたやしなひ、のうそうをかせきとす、その外には、山へゆきてたきゝをこり、柴木をこしらへて、塩木に沽却しけるものなれは、けこあまたもちたりけり

かれらとうちつれて、うしをひきては野飼にいて（20オ）、斧をもちては山にいり、たきゝをとり給ふほとに、いつしか、ならはせ給はぬ御事なれは、身のくるしさ、心のつかれ給ふ事、かきりなし、されとも、あるしなるものとも、世に、いたはりふかく、あはれみけるほとに、心ならすして、とし月をふらせ給ふ（20ウ）

〔おちくほ　秋之下〕

されは、ちうしやうとのゝ御ありさま、いつとなく山かつめきて、あさましき御かたちとそ、なりこたれさせ給ふ、さなきたに、ひなのすまゐはつたなきに、あしたには、山にいりてたきゝをこり、夕へには、ひろき野沢にたち出て、牛馬に草をかひ、谷川におりては、ゆあらひをさせ給ふほとに、御手あしは、たゝ、千とせをへたる松かえの苔おひたるにことならす、かほも、御くしも、おく山のすみやくおきなにこと（1オ）ならす、あさましき御ありさま、事いはんかたもなき身とそなり給ふ

かくて、月日をおくらせ給ふほとに、有とき、此あるしかまうけたる子ともの、七つになりけるか、ふりよにかせのこゝ地とて、一日二日ふしけるか、大ねつ、もつてのほかに出、そのまゝはかなくなりにける、父母かなしむ事、いはんかたなき、されとも、しやうしのならひなれは、ちからなくてとふらひぬ、また程なく、かひける牛、いさゝかなやみてしす、こはいか（1ウ）にとなけく所に、ほとなく、うちつゝけて五つ六つまかりにけり、その後、あるしの女はうも、やみけるほとに、たゝことならすおもひて、博士をよひて、ことのやうをうらなひてたひ候へと、いへは

はかせ、さつしよをこと〳〵く披見して、いふやうは、是は、此屋のうちに、官位の祖人おはしけるか、かゝるふしやうのはにふのこやに、牛馬同傍の所固せしとかめによりて、かやうにたゝり給ふなり、いそきこれをあらため給はすは、こと（2オ）ことく、日を追ふてほろふへしと、申ほとに（2ウ）

〔挿絵・第一図〕（3オ）

あるし、おとろきて、めしつかふものともを、こと〳〵く、あらためてみけるに、いつれも、他こくのものはあらす、みな、をのかゆかり、同村のものともなれは、まかふへきものなし、爰に、すきし年の国のさはきに、かゝへをきしおのこそ、かつて、ゆくゑをしらさるものなれは、よひいたし、とはゝやとて、中将とのをよひて、そも〳〵御身は、いつくの人にて、いかなるなかれやらん、名のりたまへと、申けれは

ちうしやうとの、我は、みやこかたの、かたやま（3ウ）かけにすみし、土民にてさふらふか、一とせ、つくしへくたり給ひし帥とのに、夫にとらせられて、くたり給ひしか、いれいによりて、道よりすてられ候ひしほとに、あな、つらしやと、うらめしさ、かきりもなく、かなしかりしに、とかくしてえやみぬ、それより、竹のおかといふところにある人に、ふちせられて侍りしか、ちかきころのみたれに、おちうとゝなりてまとひありきしを、これにおきてふちし

給ふなりと、申させ給へは
さもあれ（4オ）かし、御へんならて、あやしきものはいゑにな
し、みやこかたといへるなれは、なにとやらん、空おそろしきやう
の殿と、申せは
いかやうなる人にても、国のかみもしやうそくして、しやうしかつ
かうし給ふなり、とかく、御へんは、あやしく今まてなしみ候て、
今さら、いたしたてまつらん事、あはれとはおもひ候へとも、かや
うに、家かたゝり侍りて、ほろひさふらひては、せんなし、いつち
へもおはして、宮つかへし給へとて、米銭をよう（4ウ）いして、
まいらせ、出しにける
ちうしやうとのは、ちからをよはせ給はす、此ほとは、御なさけと
もありかたしと、の給ひて、なく〳〵出させたまひにける（5オ）

〔挿絵・第二図〕（5ウ）

扨、あるしは、それより、こゝ地も次第〳〵にかろくなりて、ほと
なく、ほんふくしたりけり、牛馬につけても、なにのわさはひもあ
らされは、はかせ、よくうらなひ給へるとて、さま〳〵の引出物を
そなしにける
さるほとに、ちうしやうとのは、それよりも、又、うきたひにまよ
はせ給ふか、いつちをそこともわきまへ給はす、あしにまかせてい
そき給ふほとに、須磨のうらといふところに、いたり給ふ、まこと
に、心も須磨の山おろし、汀の（6オ）松にをとつれて、琴をしら
ふるにことならす、なきさにはあまをふね、釣小舟、いりえ〳〵の
かたよりも、あさなきに漕いてゝ、かつきするも、いとあはれなり
かつきする、須磨のうらはの、あまをふね、見るめをさへに、袖
はぬれけり
かく、うちなかめ給ひて、年比は、をとにのみきゝ侍しに、思はす
も、今見る事こそふしきなれと、ひとりこちて、たゝすみ給ふに
やんことなき僧の、二人つれて、かしこにき（6ウ）たり給へる
か、いひけるは、御身はいつちへかゆき給ふそや、もし、きやうへ
もおはせは、同船すへきそやと、いひけれは
ちうしやう、聞給ひて、たれ人にてもあれかし、ありし都も恋し
く、あさ夕おもひなれにしひとも、なつかしく、かく、あさましき
うき世と成はてぬれは、今は見しれる人もあるましけれは、のほり
てみはやと、おほして、しかるへきつれにこそ侍れ、我も、きやう
へまかるものにて候、つれられ侍らは御とも申なん（7オ）と、の
たまへは
此そう、申されけるは、舟のうちは、此そうかあさゆふのやしなひ
はすへし、そのうちのみやつかへはせよと、聞ゆるほとに、かしこ
まり侍るとて、をの〳〵ひとつにのり給ふ、舟のうちにて、さま
〳〵の御物かたりおはしまして、此ほとのうきをなくさみ給ひける
（7ウ）

〔挿絵・第三図〕（8オ）

去ほとに、みやこには、主殿のつほねは、蔵人をひそやかによひ
て、いひけるは、なにと思ひ給ふそや、ちうしやうとの、御行ゑを
人々におほせつけられて、かなたこなたを御たつね候そや、まん所
の御なけきは、今さらにおはします
されは、わか君、ことしは、はや、四つにならせ給ふ、くる春は、
五歳に成給へは、御はかまきなるそや、此とき、御身とみつから、
大臣とのへ申侍りて、御めにかけ侍らは、御まこそうりやうとて、
いかによろこひた（8ウ）まふへき、たとひ、ちうしやうとの、は

かなくならせ給ひて、御ゆくゑのなきとても、この姫君を御まこの母なれは、いかて見すてたまふへき、ちうしやう、おはせぬものならは、御まこを御代つきにしたまはん事は、さたまれる御ことそやさもあらは、このわか君を、つたなきはにふのこやにて、そたてまいらせては、てんしやうへさしあけたてまつらん事、いかに心くるしからん、きやうへのほしたてまつりて、御母もろともに、いみしくかしつ（9オ）きたてまつらはやと、いひけれは

六位は、是を聞て、かしこくもいへるかな、日ころ、我もかくこそねかひつれ、ちうしやうとの丶かた見なれは、いかてか、人々もおろかにおもひなし給ふへき、さらは、人をつかはして、けちかくをきたてまつらんか、いつちにか、しかるへきところやあらんと、いひけれは

八条からはしの、さいしやうとの丶御母のしつらひこそ、今はすみあけ給ひて、もるものゝなくて、わかおはなりける人のゐけれは、此もとにをき（9ウ）侍らはやと、いへは

さらは、むかひに人をこすへきかと、いへは、六位、くたり給ひて、事のやうをひめきみへ聞えて後、京へくしたまへと、いへは、けにもとて、六位は、玉水へそまいりける

ひめきみは、見たまひて、めつらしや、六ゐ、よくこそくたり給へりけるかな、此ほとは、はるかにをとつれもあらされは、うしろめたくのみ思ひしにと、おほせけれは

されはこそ、君につかうまつる身なれは、いさゝかのいとまもえすして、あさまたきより（10オ）、ひめもすに、かなたこなたと、はしりめくり侍るそや

されは、此ころ、主殿のつほね、わかかたへきたりて、聞えけるは、わか君も、はや、くるとしは、五歳になり給へは、おうち大臣とのへまいらせて、はかまきをさせたてまつるへし、御まこなれは、いかはかりよろこひ給ふへし

さもあらは、かゝるはかなき草の廬にて、さかなくそたて侍し君を、いかてか、てんしやうへ出したてまつるへきやうに、おきたてまつりて、いみしくそた（10ウ）てさせたてまつるへし

さもあらは、八条からはしの、さいしやうとの丶御しよへ、心やすくうつし侍りて、主殿も六位も、いつしかに、見たてまつらはやと、よういし侍れは、いそきのほらせ給へと、申ける

姫君は、きこしめし、まことに、とのも丶御身も、いみしくもはからひ給ふ物かな、とかくは、人々の思はんやうにもてなしたまへと、おほせられにける

六位は、ゆかりのものともをよひて、かう〳〵なんあれは、京へのほらせ（11オ）給ふそや、此とし月、いかはかり、かしつきたまふ心さしこそ、ありかたけれと、いひけれは

けにも、かゝるいふせきふせやに、とし月おはしまして、さこそ、心くるしくおはしますらん、京へ出させ給ひなは、よろつ、御心ちもあらたまりて、めてたかりなん、さもあらは、わか君、姫君をおくり奉るへしと、いへは

六ゐ、しかるへしとて、あたりのわかものともに、御こしかゝせて、めのと丶六位は、御ともして、玉水を出させ給ふ、いつし（11ウ）かに、すみなれさせ給へは、かはかりわひしきふせやも、名残おしく思召けり

すみはてぬ、いつこもかりの、宿なれと、しはしもあれは、のこる名残は

うちすさみて、出させ給ふ、その日のたそかれときに、しのひやかに、宰相殿のしつらひへそ、いらせ給ふ（12オ）

〔挿絵・第四図〕（12ウ）

かくて、六ゐは、わか君くしたてまつるよし、とのもに聞えけれは主殿、よろこひて、よろつうちをきてまいりける、姫君、わか君を見たてまつりて、ひさにいたきのせたてまつり、さても〳〵、中将殿に、御おもさしのにさせ給ひたる物かな、いかに、父うへのおはしまさは、そてのうへの玉と、かしつき給はんにとて、なみたをそなかしける

扨、ひめ君へは、としあけなは、おうち大臣殿へくしまいらせて、いにうしたてまつらんに、たれか（13オ）、此わか君に、うへこす人やおはすへき、そのおりから、姫君もいかにいみしくおはすへき、父中納言とのにも、たいめんおはしまさは、夢のやうにおほしめすらんなと、いとひかやかにそ申ける

ひめきみは、きこしめし、御父うへは、ちかきほとに、見給ふかや、年は、いかはかり、老おとろへさせ給はめと、の給へはさまてにも見えさせたまはす、たゝ、ねてもさめても、ひめ君の御事のみ、おほせらるゝとこそ、聞えさふらへと、申れはけに、さこそ（13ウ）とて、うちかたふきてなき給ふも、こよなし、ひめきみの御こゝろは、いくとし月をへ給ひても、露わすれ給はぬは、ちうしやうとのゝおもかけなり、左遷し給ひしはいしよは、きくもけうときみたれ出きて、ちり〳〵にやふれぬると、きゝ給へは、中将とのも、つゝかなくおはすへきとはおほさすされとも、君より、くに〳〵御たつねあると、きこえけれは、これをちからにし給ひて、今ひとたひは、此世にて、あふせもあらまほしとそ、おほし（14オ）ける

主殿は、それより、あさゆふに、ひめきみへ人なとまいらせて、六位ともろともに、かしつきたてまつりける（14ウ）

〔挿絵・第五図〕（15オ）

さるほとに、ひめ君は、めのとにの給ひけるは、つら〳〵物をあんするに、みつからは、六すみの御ほとけへ、かそいろの人々、ふかくいのり給ひて、たまはらせ給ふときく、されは、いみしき御りしやうこそはおはせすとも、かくはかりあさましく、母には、しゝてわかれ、ちゝうへには、生てはなれ侍ることの、かなしさよ、我をあはれと見給ひし、ちうしやうとのは、ゆくゑもなく、うせさせ給ふ、かくはかなきうき身と、なしはて給ふ事の、かなしさよ

とかく（15ウ）とあんするに、ちうしやうとのは、いきてましますか、または、此世にもおはせぬ身なるか、御ほとけにまいりて、御しけんをうけ侍りて、なき身とならせ給はゝ、わかは、大しんとのへまいらすへし、みつからは、あまになりて、世をいとひ、御母うへのなきあとを、とふらひたてまつり、ちうしやうとのと、ひとつはちすと、いのらはやとこそ、おもひさふらへと、聞えけれはめのと、かはかりおほしたつそ、ならはまうて給へ、されとも、此わか（16オ）きみは、人々に、もしも、見しられてはあしかるへし、我は、あとに、もり侍るへきそやと、申せはさにこそとて、ひめ君は、御すかたをやつして、あやしけなる御ありさまにて、たゝひとり、からはしを出給ひて、六すみの御ほとけへそ、まうてさせ給ふ、御まへにまいらせ給ひて、わにくちをならして

当時大悲の御ほとけは、太子の御はたにかけさせ給ひし、ひふつの

ほとけと、うけ給はる、ちよくせの、しゆしやうさいとのために、いま（16ウ）こゝに、あらはれ給ふ、されは、三十三身の春の花は、一念欽仰のかうへにひらき給ふと、うけ給はる

ことに、みつからは、此御ほとけの、さつけ給ひし我そかし、かくまてはかなきうき身そ、ならは、なとて、生をはうけぬらん、あかてわかれし中将との、うき世におはする物ならは、りしやうあやまたす、たいめんとけさせて給はるへし、もし、はかなくなり給はゝ、いのちをめして、みらいにて、一つはちすにむかへさせ給へとそ、いのらせ（17オ）給ふ

かくて、御しけんをかうふりなんとて、ひたりのかうしのうちに、他念なく、水しやうのしゆすをくらせ給ひて、ねんしゆしておはしける、九重の童俗なんによ、あさまたきより、所をきてそまうてける

こゝに、としのよはひ、二十四五はかりにみえさせ給ふ、くきやうの、あをかりきぬに、ゑほし、けたかくき給ひ、あてやかにまゆつくりて、そのさま、いみしく、心にくゝ見えさせ給ふか、わらは、すいしんなとめしくして、御前（17ウ）にかしこまりて、ほとけに物もうし給ふ、ふせいなり

ひめ君は、つまとのいさゝかあきたる、みすのすきより、つく〳〵と見たまへは、なへてならさるよそほひにて、おはします、むかしは、かはかりの人々、見あき給ひしか、ちかきころは、山里にすみ給へは、いまさら、めつらかにおほして

人にとはせ給へは、三条の大なこんとのゝ御子に、四ゐのせうしやうとのと、申人にてそおはしますと、いへは

なにゝよりてか、まうて給ふにやと、おほせ（18オ）けれは

この人、日ころおもひ給へる女はうを、いさゝかの事ありて、女房、うちうらみうせ給ふを、ほいなくおほして、此ゆくゑをしらまほしく、ねかひ給ふて、まい日まうて給ひけると、聞えけれは

あらいみし、人のうへには、かはかり、ほとけに申て、たつね給へる人のあなるに、我妻のちうしやうとのは、ゆくゑもおはしまさす、かはかりなけきて、ほとけをたのみまいらするに、世にはいろをのみふりかへて（18ウ）、さま〳〵のおもひあるにやと、おほしける（19オ）

〔挿絵・第六図〕（19ウ）

さるほとに、中将とのは、此そうとうちつれさせ給ひて、のほり給へるに、ほともなく、ひやうこのうらとかやいへる所に、つかせ給ふ

そう、の給ひけるは、我は、とうこくかたへ、しゆきやうにまかるなり、御身は、また、是より京へおはして、ほとけをいのりたまへ、さもあらは、よろつ、心のまゝにまんそくし給ふへしと、のたまへは

中将は、きこしめし、それはしかるへきおほせかな、いつれのほとけをか、たのみたてまつりなんと、申させ（20オ）給へは

こゝのへのうちにても、六すみなるほとけを、一ねんにたのみ給へ、りしやうはうへん、ことなるほとけそやと、おしへさせ給ふ

ちうしやうは、きこしめし、我心におほしめす事こそ、おほからめ、いそきまいりて、おかみ奉らん、かたしけなくこそ、おもひたてまつれと、うちわかれんとし給ふとき、俄に異香かほりて、御身より、ひかりさしそふこゝ地すと、見たまへは、かたちけして見え給はす、あら有かたや、是は夢なるか（20ウ）、うつゝなるかや、

あらなにともなやと、御こゝろ、はう〳〵としてそ、おはしける（21オ）

〔挿絵・第七図〕（21ウ）

それより、ちうしやうとのは、たのもしくおほして、かさ、ふか〳〵とめさせたまひ、日ころなつかしくおほせし、みやこへとそ、のほらせ給ふか、鳥羽のほとりにわたらせたまへは、ものゝふのいかめしきか、侍百はかりうちくして、馬にのりて、きらめきわたりて、きたりけるか、ゆきゝの人をうちはらひて、とをりけるほとに、中将とのも、みちのかたはらへしりそきて、とをし給ふに

あるさふらひの、このちうしやうとのを見て、けう（22オ）かるいきものかな、かはかり色のくろく、こけむしたるは、なにとしたるものやらん、いかなる所より出たるいき物そやと、にくさけふかきむくつけおとこ、うちわらひける

中しやう、おほしめすは、もとより、かくこそあるへけれ、みやこのうちへいりなは、さそ、人〳〵の、おかしくうちわらひなん、まことにおもはゆし、いかゝすへきと、あんしわつらひ給へとも、ほとけの御おしへを、ちからとして、のほり給ひける

さるほとに、ひめ君は（22ウ）、すてに、七日にまんするあかつき、ほとけは、いとかうはしき御こゑを、とちやうの内より、出させ給ひて

いかにや、此ほと、なんちかなけくちうしやうは、この世にあるとはいへとも、たいめんせん事は、ほとあるへし、そのうちに、なんちかつれあふへきものこそ、さつくれ、御たうのたつみにあたりて、さもあはれなる、山かつめきし、けうかるかたちの、おとこあるへし、これをなんちつれあひて、まつへし、さもあらは、恋かなしむ中将に（23オ）、たいめんはとくへきそやと、あらたに御しけんまし〳〵ける

ひめ君は、夢うちさめ給ひて、こはありかたき御つけかな、さりなから、我おもへるちうしやう殿に、たいめんせん事は、とをかるへしとは、なさけなくはおもへとも、いきて此世におはするなれはこそ、かくは、ほとけのおしへさせ給ふらめと、かさねてふしおかみ給ひて、しゆきやうのはうへいらせ給ひて

このほとは、さんろうのあいた、よろつ、御心さしともにあつかりま（23ウ）いらせて、ありかたくこそ候へ、御ほとけの御しけん、あらたにかうふりさふらへは、世にありかたく、おもひたてまつるそや、ことのほいに侍らはゝ、かさねてまうてゝ、御はうに、けんさん申へしそやと、の給へは

しゆきやう、きゝ給ひて、扨、御身は、いつちよりまうてさせ給ふそと、といたまへは

みやこほとりのものにてはんへるなり、かさねてまいらんとき、いみしく、ことたち侍るへしと、申させたまへは

此ほとは、女はうの、たゝひとり、か（24オ）りふししたまふに、ゑしやくなる事も侍らて、けかうし給はん事こそ、ほいなけれとそ、申されるも、けうあり（24ウ）